

8月31日現在の果実の肥大は平年と比べ、「日南1号」はやや遅く、「興津早生」及び「青島温州」はやや進んでおり、「大津4号」は平年並みです。  
極早生温州は樹上選果を、普通温州は仕上げ摘果を進めましょう！

## 令和3年8月の気象

令和3年8月の半旬別の気象を表1に示した。平均気温は第3、第4半旬が平年より低く推移し、他の半旬は平年より高かった。月平均気温は26.3℃で、平年より0.2℃高く、前年より0.9℃低かった。

降水量は第1、第5、第6半旬では降雨が全くみられず、第2～第4半旬では平年及び前年より多かった。月合計は210mmで、平年の191%、記録的な少雨であった前年の1313%であった。

日照時間は第2、第3、第5半旬で平年より少なかった。月合計は198時間で、平年の91%、前年の65%であった。

表1 令和3年8月の気象（暖地園芸研究所）

半旬	平均気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	27.1	26.2	25.7	0	6	0	49	37	46
2	26.8	26.3	27.5	116	19	0	31	37	52
3	24.7	26.3	28.4	63	19	0	9	36	58
4	25.1	26.0	27.8	32	20	0	35	35	55
5	26.6	26.0	26.2	0	20	8	24	34	40
6	27.6	25.5	27.7	0	27	8	52	38	53
平均/計	26.3	26.1	27.2	210	110	16	198	218	303

## 2 果実及び樹の生育

8月31日における調査園の果実生育状況を表2に示した。横径は「日南1号」が6.1cm、「興津早生」、「大津4号」、「青島温州」が3地区の平均でそれぞれ4.8cm、5.3cm、5.4cmであった。「日南1号」は平年の105%、前年の109%であった。「興津早生」は平年の98%、前年の94%であった。「大津4号」は平年及び前年の104%であった。「青島温州」は平年の108%、前年の104%であった。

縦径は「日南1号」が4.8cm、「興津早生」、「大津4号」、「青島温州」が3地区の平均でそれぞれ3.9cm、4.0cm、4.2cmであった。「日南1号」は平年の104%、前年の112%であった。「興津早生」は平年及び前年の93%であった。「大津4号」は平年及び前年と同程度であった。「青島温州」は平年及び前年の102%であった。

果形指数は、「日南1号」が1.3、「興津早生」、「大津4号」、「青島温州」が3地区の平均でそれぞれ1.2、1.3、1.3であった。「青島温州」は、平年より果実が扁平な傾向がみられた。

病害虫の発生状況は、8月の後半からカメムシが増加している。

表2 果実の生育（令和3年8月31日）

品 種	調査地	横 径 (cm)			縦 径 (cm)			果形指数		
		本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
日南1号	暖地園研	6.1	5.8	5.6	4.8	4.6	4.3	1.3	1.3	1.3
興津早生	三芳地区	4.3	4.9	5.3	3.5	4.2	4.3	1.2	1.2	1.2
	千倉地区	4.7	4.9	4.6	3.9	4.1	3.8	1.2	1.2	1.2
	暖地園研	5.4	5.0	5.3	4.3	4.3	4.5	1.3	1.2	1.2
	平 均	4.8	4.9	5.1	3.9	4.2	4.2	1.2	1.2	1.2
大津4号	三芳地区	5.1	5.0	4.7	3.9	4.1	3.9	1.3	1.2	1.2
	千倉地区	5.0	5.1	5.4	3.8	4.0	4.2	1.3	1.3	1.3
	暖地園研	5.8	5.1	5.2	4.2	4.0	4.0	1.4	1.3	1.3
	平 均	5.3	5.1	5.1	4.0	4.0	4.0	1.3	1.3	1.3
青島温州	三芳地区	4.9	5.0	5.0	3.9	4.1	4.1	1.3	1.2	1.2
	千倉地区	5.3	5.0	5.3	4.1	4.0	4.2	1.3	1.3	1.3
	暖地園研	5.9	5.1	5.2	4.5	4.1	4.1	1.3	1.2	1.3
	平 均	5.4	5.0	5.2	4.2	4.1	4.1	1.3	1.2	1.3

各地点の各品種の値は40果の平均

ただし、鳥害、落果等により調査果実を変更した樹がある

果形指数は、横径／縦径

## 9～10月の栽培管理

### (1) 摘果

極早生温州及び早生温州は樹上選果を行う。極早生温州は収穫1ヶ月前の9月中～下旬に、早生温州は収穫1ヶ月前の10月上～中旬に、傷果や病虫害被害果などを取り除き、収穫、運搬及び選果の労力を軽減する。

普通温州は着果過多により樹勢が低下している場合や小玉になっている場合に、葉果比が20～25程度となるように仕上げ摘果を行う。その際、小玉果、傷果、奇形果、果梗が太い果実、上向きの大玉果などを優先的に摘果する。

### (2) マルチ資材の被覆

高品質果実の生産にマルチ栽培は有効である。被覆は夏の乾燥期が終わり秋雨期に入る前の8月下旬、遅くとも9月上旬に開始する。土壌の乾きやすさや灌水設備の有無によって、開始時期や被覆面積を調節する。マルチを使用するのに適した園は、ゆるやかな傾斜地で日当たりや水はけが良く、風の影響が少なく、普段から高品質の果実が生産できる園地である。

### (3) 主な病虫害の防除

#### 1) かいよう病

本病は2次伝染を繰り返すので、薬剤で春梢に対する初期防除を徹底する。果実に対しては梅雨から果実肥大期を重点に防除し、その後は夏秋梢に対するミカンハモグリガの防除を行う。また、特に感受性の高い品種を栽培する場合には、園地の防風対策を行う。ただし、銅水和剤はマシン油乳剤、デランフロアブルとの近接散布による葉害が起こりやすいので、2週間は散布時期をずらす。

#### 2) ミカンサビダニ

6月頃から9月まで果実を加害する。被害が拡大する恐れがあるため、果実1～

2個の被害を見たら直ちに防除する。特に梅雨明け直後に行う防除が重要である。樹冠の内部・上部など薬剤のかかりにくい部分に発生が多いため、摘果時に注意深く見る。黒点病の防除に用いられるマンゼブ剤により同時防除が可能だが、多発した場合は登録のある殺ダニ剤の使用が有効である。

### 3) ミカンハダニ

果実や葉を加害する。増加期の6月にはマシン油乳剤(97%)150倍液を散布する。散布の判断は、寄生葉率30%を目安にする。また、9～10月に多発するので、秋期には寄生葉率20%を目安に殺ダニ剤を散布する。

### 4) カメムシ類

園地への飛来を早めに発見し、殺虫剤を散布する。登録のある薬剤は、直接虫体に接触して殺虫効果を発揮するため、予防散布は行わない。夕刻から夜間に飛来する個体が多いので、夕刻に散布すると効果的である。合成ピレスロイド剤は比較的残効性が長く、効果が高いが、天敵類に及ぼす影響も大きく、カイガラムシ類やハダニ類の発生が助長されるので注意する。

※極早生温州等、収穫の早い品種については農薬の使用から収穫までの日数に注意をする。

※農薬の登録内容は変更になる場合があるため、農薬使用の際は最新情報を確認する。

なお、表の数値は表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計は一致しない場合がある。

《 生育情報の問合せ先 》千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話 0470-22-2961※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>